

## 犬猿の仲

二年 則武 遼

今年の夏、自分は家族で二泊三日の旅行に行った。遠くまで出かけて、そこで二泊もすることは、自分にとっては小学校以来のこと、かなり久しぶりだった。それは、我が家に飼い犬がいたからだだった。

犬は、自分と弟が産まれるよりも、早くこの家に来た。つまり、自分たちよりも犬は年上だった。犬は、おそらく自身よりも年下である自分たちを、下に見ていた。また、自分たちも「飼い主」と「ペット」という主従関係で、犬を自分たちよりも、下の存在だと感じていた。

犬はかなり高齢まで生きていた。自分たちよりも前に産まれ、中学二年生になったこの年まで、約十七年間あった。自分が小学校にあがるころには、もう十歳だった。十歳になると、だんだん動きが衰えてきて、何回か入院をすることもあった。中学生になったころには、後ろ足の筋肉が衰えてしまい、前足だけで、歩くようになっていた。遠出が出来なくなっていたのは、これが理由だった。

だんだん衰えていく犬の世話を手伝っていて、正直自分は面倒臭いと思っていた。家中が汚れてとても臭かった。転んだら立てないのに、起こして転んだらまた起こすという作業はとても嫌でたまらなかつた。

中二になってすぐに、犬は亡くなってしまった。亡くなってしまふ日の前日、自分は、瀕死状態の犬を隣に母と過ごした。次の朝、ベッドで寝ている犬を撫でてから、登校した。それが、生きている犬と触れ合う最後の瞬間だった。

帰って来たら、犬は死んでいた。母の話によると、自分たちが登校した直後に亡くなったそうだ。そして母は、「犬は自分たちが悲しいまま、学校に行かないよう待ってくれたんだよ。」と言った。自分は驚くことしかできなかった。お互い下と見ていると思っていたが、犬はすっかり自分たちを同じ家族として見ていてくれたのだ。

犬は、自分たちに多くの物を与えてくれた。辛いときも、犬とたわむれていると気持ちが悪くなった。犬が若いときは一緒に旅行をしてたくさんのお出を出させてくれた。また、犬の世話は、人の介護にもつながるのではないかと思った。将来、自分が大人になれば、親の介護をすることになるかもしれない。犬は自分たちに犬自身を通じてとても貴重な体験をさせてくれた。

犬の存在が嫌と思ってしまうこともあったが、今では犬は自分たちにたくさんのお喜びを与えてくれた世界一の家族だった。そんな愛犬を忘れずに生活していきたい。